

最終報告書

1. 事業の概要

| | | | | | |
|-----|-------------------|-----|-------------|----|------|
| 事業名 | 石巻市災害支援活動 | | | | |
| 開始日 | 2011年 4月1日 | 終了日 | 2011年 6月30日 | 日数 | 90日間 |
| 団体名 | 特定非営利活動法人オン・ザ・ロード | | | | |

| | | | |
|--------|------------|--------|-------------------------|
| 総額（税込） | 9,900,000円 | スタッフ人数 | 運営 15人 専門家 5人 他 120人 |
|--------|------------|--------|-------------------------|

| | |
|-------|---|
| 事業目的 | 活動拠点運営による被災地復興支援ボランティアの組織的かつ継続的派遣実施と、ボランティア・リーダーの育成 |
| 事業の背景 | 甚大な津波被害を受けた宮城県石巻市では、震災直後から多くの NGO/NPO が活動を展開する一方、石巻市内のボランティア活動拠点は受入能力を超え、トイレ等衛生面やライフラインの問題が起き、新たなボランティア受入が困難な状況となっていた。しかしながら、被災者の避難生活支援、復興支援には更に多くの人手が、継続的に必要であった。 |
| 事業の概要 | <p>コンポーネント① ボランティア・ビレッジの開設</p> <p>津波の被害を受けていない宮城県内陸部の大崎市（石巻市から内陸部に約 40km）にボランティア・ビレッジを開設する。</p> <p>ボランティア・ビレッジには衛生面を配慮し、仮設トイレを 2 箇所、洗濯場 1 箇所、また、炊き出し、ボランティアの食事を提供するために必要なシンク、冷蔵庫、調理器具を備えたキッチンや、石巻災害対策本部、東京事務所等との連絡機能を携えた事務所も設置する。</p> |
| | <p>コンポーネント② 宮城県石巻市内でのボランティア活動</p> <p>(1) 瓦礫・泥撤去作業 (2) 避難所等での炊き出し (3) 救援物資の配布</p> |
| | <p>コンポーネント③ ボランティア・リーダーの育成</p> <p>当団体のボランティアコーディネーターが、ボランティア・ビレッジ滞在と実際のボランティア活動を通してボランティア活動やボランティアマネジメントに必要な知識、技術を指導する。チームリーダーを経験することにより、即実践する。継続的に復興事業に携わることができる地元（宮城県内及び東北地域）のボランティアをリーダーとして育成することが望ましい。</p> |

2. 事業の評価（評価者：笹川平和財団 岡本 富美子）

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

- ▶ 大量のボランティアによる被災地の支援活動を継続的、かつ効果的に展開する上で、①後方支援拠点としてのボランティア・ビレッジの開設・運営、②被災地でのボランティア活動、③ボランティア・リーダーの育成の3つを組み合わせた事業計画は妥当であったと考える。
- ▶ 活動地域については、第一フェーズでは石巻市渡波地区や女川町を選定したが、両地区とも、津波の被害が大きかった地域の一つであり、高齢者が多く被災者自身による復興活動が進みにくい地域とも言われてきた。そうした地域での活動の意義は大きかったと考えられる。
- ▶ ボランティア派遣の開始時期は4月15日頃とやや遅れをとったようだったが、事業開始後地域に密着した支援を精力的に展開するための体制を迅速に整えたという点では、オンザロードならではの特性を活かした形で評価に値する。

【コンポーネント①】

- ▶ 震災直後、被災地の周辺で水道やガスなどのライフラインが復旧しておらず、ボランティア・スタッフの心身の健康管理・安全確保も課題の一つであった。従って、大崎市にボランティアの後方支援拠点となるビレッジを開設する事業案は妥当であったと考えられる。

【コンポーネント②】

- ▶ 泥掻きや炊き出しなどの活動はいずれも被災地のニーズが高く、なおかつ行政の支援の行き届かなかった部分であり、ボランティア派遣を通じて対応できたことは非常によい活動であったと考えられる。

【コンポーネント③】

- ▶ ボランティア・リーダーは社会人の割合が高く、仕事を中断したり家族を置いて被災地に赴いたりした人もいる。また、プロとしてのノウハウを生かした活動をしている人もいる。そうした人材をリーダー育成事業を通して確保することは、結果として災害地での安全かつ効果的な活動につながり、中長期的な視点から被災地の復興に寄与するものと考えられる。

(b) 有効性：目標の達成率

【コンポーネント①】

- ▶ ボランティア・ビレッジにはボランティアが宿泊するテントが約20-30張、仮設トイレ、洗濯場、炊き出し用のキッチン、大型テント、救護室を兼ねたコンテナなどが設置された。
- ▶ それにより常時100人以上、一日最大260名近くのボランティアの受け入れが可能となり、プロジェクト期間の受け入れ総数は8,419人に上った。

【コンポーネント②】

- ▶ 家屋や道路からの泥の掻き出しに最も力を入れたとのことであり、プロジェクト期間中の実績

としては、参加ボランティア 5,770 名、依頼件数 668 件、終了件数 854 件、運搬廃棄物 9,015 トン、畳処理枚数 14,776 枚、側溝泥掻き 38,638m に及んだ。依頼件数を上回る数の件数をこなしたという点では、十分現地のニーズに対応した活動と考えられる。

- 石巻市渡波地区、女川町の避難所で総数 45,437 食の炊き出しを行い、栄養改善に寄与した。
- 他に、渡波地区内の仮設お風呂の運営と被災者へマッサージ+ヘアークットの提供（約 2,000 名）、津波の被害を受けた店舗の再開をサポート（うち 15 件が再開）、仮設住宅への引越しのサポート（379 件）を行った。

【コンポーネント③】

- ボランティア・ビレッジでは被災地の状況・ニーズに合わせて班が形成され、各班での行動のリーダーとなる班長を 10 名程度育成した。これにより、ボランティアの健康・安全管理が行き届きやすくなり、被災地から上がってきたニーズへ効率的に対応できる体制が整った。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

【コンポーネント①】

- テントや食事、お風呂、洗濯場や救護施設などを準備することで、これまでボランティアの経験がない人間も受け入れることができた。
- しっかり休息がとれる拠点を準備したことで、長期間にわたってボランティアに参加できる体制が整った。
- ボランティア・スタッフ間のコミュニケーションが密に取れることで、被災地の日々の状況やニーズなどの情報共有につながり、よりよい支援が可能となった。

【コンポーネント②】

- ボランティア・ビレッジでは、被災地の状況・ニーズに合わせて、①ドロ掻き出し・ガレキ撤去班（家の片付け班、道路片付け班）、②炊き出し班、③仮設シャワー介助班、④生活・ボランティア・ビレッジ運営班、⑤撮影班、⑥ニーズ調査・受け付け班、⑦救援物資の配布班、⑧避難所介助班、⑨店舗復興サポート班、⑩宮城県北部・岩手県遠征調査班、⑪仮設住宅への引越しサポート班などの班を形成し、ビレッジリーダーの下、毎日、全体の情報共有を行った。
- それにより、重機やトラックを用いたガレキの解体・撤去・運搬、炊き出しなど、スピード感のある支援を効率的に行うことが出来た。

【コンポーネント③】

- ボランティア・リーダーは作業計画の立て方やチーム編成のノウハウ、道路の復旧状況や混雑状況などの土地勘もできているため、とにかく仕事が速くて確実であった。またそれが地元でのオンザロードの評判を上げることにつながった。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティとの連携はできていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

- 石巻市内でのボランティア活動は、石巻社会福祉協議会と連携しながら効率的に作業を実施する体制が出来ていた。
- ボランティア・リーダーの育成を通じて、長期間被災地に滞在する班長が存在したため、地元住民はじめ、石巻市役所、市議、石巻災害復興支援協議会に所属する民間支援団体等との信頼関係が構築されており、各種調整がスムーズに運ばれていた。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

- 本事業終了前に何ができるかをオンザロードスタッフで協議した結果、6月26日に渡波元気祭を開催することになり、オンザロードが製作したガレキ神輿が出る中、約5,000人が参加したとのことだった。このガレキ神輿を担いで石巻の川開き祭りにも出たそうだが、そこで「石巻2.0」という元気のある若者のグループとつながりができたので、今後、商店街の復興など様々な角度から協力していきたいという話につながった。
- オンザロードのボランティアは、今回の被災地の支援のために、自分たちの持っているリソース（時間、技術、ノウハウ、アイデアなど）を精一杯発揮していた。20代、30代の人材が社会とどう関わっていくかという観点から、新しい生き方の提案につながる可能性を感じた。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

- ボランティア事業において、ニーズ調査・受付班を編成したことで、刻々と変わるニーズ（仮設住宅への引越し支援や仮設住宅でのコミュニティ再生支援）や埋もれているニーズ（漁業再開支援、店舗再開支援）を発掘することが可能となった。
- ボランティアには学生、社会人、性別、年齢などを問わず幅広い層の人たちがまんべんなく参加しており、思ったより社会人が多いという印象を受けた。リピーターとして、複数回参加している人も多いとのことだった。ボランティア・ビレッジの開設・班制度の導入などで、①初心者や短期間しか参加できない人も入りやすくしたこと、②拠点があることでオンザロードならではの活動の展開が可能となったこと、③各リーダーに裁量と責任が与えられていることで、迅速で柔軟な活動が展開しやすく、やりがいがあること、④ボランティアの調整や作業のノウハウが蓄積・共有されており、作業効率を上げて効果的に活用を展開できること、などが影響していると考えられる。

3. 評価者の所感

- 本事業において、ボランティア・リーダーが長期間のコミットメントにより各々の活動に責任を持つ体制を組んだことは、災害急性期の効果的な支援のあり方のみならず、復旧・復興期の支援や関わり方という観点からも多くの示唆がある。
- オンザロードは、ボランティア個人の特性や得意分野を引き出すような工夫がなされており、それが爆発的な行動力や想像力の発揮につながっているようだった。復興に向けた課題を乗り越えていくために、オンザロードが果たしうる役割に期待したい。